

四季折々の森の植物や鳥・虫などの動物を紹介します

1. センダン(センダン科)

センダンは暖かい四国・九州地方の丘陵地などに自生している樹木ですが、街路樹や庭木としてもよく利用されています。びわこ地球市民の森には多く植樹されていて、5月から6月にかけて淡い紫色の花をつけます。

花びらは5枚でいくつかの花がまとまり花房をつくります。センダンは他の樹に比べてとても成長が速く、樹高は15m~25m、胸の高さでの幹の直径は40cm~50cm、ときには1m近くにもなります。そうして、日光を遮断するなどまわりの樹の成長を阻害するので必要に応じて間伐をする必要があります。

果実は長さ1.5cm~2cmのタマゴ型をしていて、10月から12月に濃い黄色に熟します。葉が落ちたあとも黄色い実が残り、青空に映えてとても美しい眺めです。

葉は植物学では「2~3回羽状複葉」と呼ばれる形で、小葉3枚に分かれた複葉がさらに鳥の羽のように連なって1枚の葉をつくっています。

1枚の葉はとても大きいので、子ども達に説明するとびっくりします。このような葉のつきかたは日本原産の樹ではとても珍しいものです。



2. エゴノキ(エゴノキ科)

エゴノキは大型遊具の近くの橋を渡り、左手にすすむと数本のエゴノキがあります

下向きに咲く花が可憐なことから庭木として親しまれ、公園などに植栽されます。5月から6月にかけて咲く花は白色のほか、薄い桃色もあります。

7月から8月に灰色の楕円形に近い球形の実ができます。熟すと皮が縦に裂けて落ち、堅い種子が現れます。種子の皮にエゴサポニンという麻酔効果のある有毒成分が含まれていますので決して口にしないようにします。

名前の由来は、誰か実を舂めた人がいるのでしょうか？ 強烈なえぐみを感じるところから「えぐい木」、エゴノキと転化したといわれます。



3. ニワゼキショウ(アヤメ科)

公園の芝生広場、草地、道ばたで見かける小さなアヤメ科の雑草です。もともとは北アメリカからわが国に入った帰化植物(外来種)で花の色は白色、薄紫などが多いです。かたまって群落をつくると美しく、昔は園芸植物として植えられたこともあります。葉の形が剣のようにとがっていてサトイモ科のセキショウに似ており、庭に生えるところからニワゼキショウと言われています。



4. オオヨシキリ(ウグイス科)

オオヨシキリは5月の半ば頃、南の国から日本へ渡ってくる夏鳥です。渡ってきたころは水路やワンドのヨシがまだ大きく伸びていないので、近くのヤナギやクヌギ等の樹木に止まって遠慮がちに小さな声で鳴いています。

やがて夏が近づきヨシなどの水生植物が大きく成長すると5から6本のヨシを巧みに利用して巣作りをはじめます。その技術はとても上手でお椀のような巣ができあがります。

最初に、渡ってくるのはオス達で来た早くにきたオスは敵から襲われる心配のないヨシ原の中央部に巣を作りますが、あとから渡ってきたオスはだんだんと条件の場所に追いやられて巣作りをするようです。

彼らはゲツゲツ、ギョギョー・ギョギョーと、赤い口の中を見せながら互いに争うように大声でさえぎってナワ張りを宣言し、後から来るメス(結婚相手)を探します。公園の水辺の夏の風物詩として毎年見られる景観です。



5. アオサギ(サギ科)

水路沿いの園路を歩いていると、アオサギをよく見かけます。この鳥は警戒心が強く、人が近づくと飛び立ち逃げていきます。飛んでいるときは首を乙字の形に縮め、足を後に伸ばして、しかもゆっくりとした羽ばたきで直線的に飛ぶのが特徴です。

ツル、ガンそしてカモなど多くの首の長い鳥がいますがこれらの鳥は長い首をまっすぐに伸ばして飛びます。

アオサギはわが国にすむダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギなどのサギ科の仲間では最も大きな鳥です。

姿は全体に淡い青色で頭に長い青黒い色の飾り羽がついています。

アオサギの繁殖地(コロニー)は旧野洲川北流の中主吉川湖岸緑地にあります。ここから、地球市民の森へは餌をとりやってくるのでしょう。

(注:コロニーとは群れをなしてすむ集団営巣地のこと)



6. ハマヒルガオ

森づくりセンターから西北西の方向にある2本の大きなエノキの傍の園路を少し進むと左側にハマヒルガオが見られます。ハマヒルガオは琵琶湖大橋の東詰から少し北西の方向にある守山市の「なぎさ公園」にこの時期にはたくさん咲いていて、TVや新聞などマスコミでも紹介されます。

地球市民の森のハマヒルガオはなぜここに生育しているのか不明ですが、ややピンク色をした朝顔に似た花が可憐です。ハマヒルガオは海辺の砂浜に咲く植物ですが、琵琶湖岸に生育しているのはとても珍しいと言えます。

